報　告

テキストマイニングの手法を用いた地域活性化に関わる人々の言説の分析

星井 進介[1]

[1] 教育研究技術支援センター（Technical Support Center for Education and Research, National Institute of Technology, Nagaoka College）

Analysis of discourse of people involved in regional revitalization by using text mining

Shinsuke HOSHII[1]

要旨

マネジメント思考に関する調査から言葉を対象としたテキスト分析の課題が挙がったことに基づき，テキストマイニングに着目した．本報では調査分析対象として，現代アートを用いた地域振興策の先駆的事例として知られる新潟県十日町地域で開催される「大地の芸術祭」を取り上げた．芸術祭については，これまでに地域住民らを対象とした回答選択型アンケート結果に基づく定量的な分析は実施されているものの，同時に行われている自由記述アンケートの結果については，体系的で整理された分析はなされていない．ここでは，これまで整理して取り上げられることのなかった地域住民の自由記述アンケートに着目し，テキストマイニングの一手法である計量テキスト分析を用いたアプローチによって大地の芸術祭における住民の声を拾い上げ，地域活性化事業に対する意識の変容や，これまで捉えられなかった課題を見出すことを目的として検証を試みた．分析ツールは計量テキスト分析ソフトである KH Coder を使用した．分析対象テキストの特徴語の抽出，共起ネットワークの作成などを行うとともに，言葉が意味する概念に焦点をあてて分析するためのコーディング処理を実施し，それぞれのコード化した項目の推移傾向を分析することにより，人々と対象事象との関わりや持続的な地域づくりの在り方を探った．

Key Words : *Revitalization of local communities, Open-ended text, Text mining, Quantitative text analysis*

１．はじめに

昨年度のマネジメント思考に関する調査 [1)]から言葉を対象としたテキスト分析の課題が挙がったことに伴い，テキストデータに基づく分析手法に着目し，自由記述データとして表される人々が発する言葉を調査事例とした分析を試みた．本報では，テキストマイニング技術の一つである計量テキスト分析の手法に基づいて，これまで扱われることのなかったテキストデータに着目し，テキストマイニングの技術を活用することで地域活性化事例における住民らの声の可視化や特徴的に現れるキーワードの抽出などから地域住民の感情の変化などについて検討を行った結果を報告する．

テキストマイニングとは，文書などのテキストデータを形態素と呼ばれる意味を持つ最小の言語単位に分解し，各形態素の出現頻度やそれらの相関性などを定量的に解析し，有用な意味や情報を見出す分析方法である．テキストマイニングの特徴は，大量のデータを対象とした分析処理が可能なこと，言葉

を形態素として数値的に処理するため，データの主観的，恣意的な解釈を回避できること，などが挙げられ，文章データの数量化と可視化が可能となる [2)].

本稿では，現代アートによる地域活性化の先駆的事例である「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」（以下，大地の芸術祭と略記）を調査対象として取り上げた．大地の芸術祭では地域住民らを対象としたアンケート調査が実施されており，そこでは質問調査票に基づいて，当該事業への協力意向や継続開催の希望などの住民意識の調査結果が報告されているが，同時に回答されている自由記述アンケートの結果に関しては，個々の自由回答が列記されるだけで定量的かつ系統的に取りまとめられない状況であった．

人々による非構造的で自由に語られた話や記述された文章には，人々を取り巻く環境や認知の対象となる社会現象に対する意識や考えが包含されている．認知の対象となる現象に対して人々が抱えている意識や考えは，言語化されることによって顕在化されて明確となり，生活や社会現象に裏付けされた存在として現出するという側面を有していると指摘できる [3)]．このようなことから，人々が発した声，記したテキストを読み解くことは，潜在化していた人々の意識を浮かび上がらせる作用があると考えられる．これまで検証されてこなかった大地の芸術祭に対する地域の人々の意識を捉え，事業に対する意味づけを探ることは，地域活性化の取り組みと人々の関わりを捉える上で意義あることと思われる．そこで，これまで捨象されており，整理して取り上げられることのなかった地域住民の自由記述アンケート結果に着目し，テキストマイニングの一手法である計量テキスト分析を用いたアプローチによって大地の芸術祭における住民の声を拾い上げ，地域活性化事業に対する意識の変容や，これまで捉えられなかった課題を見出すことを目的として検証を実施した．

本報は 5 つの章で構成されている．本章では本研究の意義と目的を示した．2 章では，調査事例である大地の芸術祭の開催地域である新潟県十日町市における芸術祭の開催に至る経緯やテキスト分析手法などについて概説した．3 章では，テキストマイニングの分析結果について，4 章では結果の考察について論じた．5 章では本報のまとめと課題について述べた．

２．調査対象データと分析手法

２．１　大地の芸術祭の開催経緯と概要

大地の芸術祭は，越後妻有地域または十日町地域と称される新潟県南部に位置する十日町市と津南町を会場として開催される．芸術祭は 3 年に一度ずつ開催され，約 2 か月間の開催期間に 50 万人を越えるツーリストが訪れる世界でも有数の現代アートを題材とした大規模な国際的芸術祭である．

開催都市である十日町市は，著しく人口減少や少子高齢化が進展するという，現代の日本が抱える課題を先取りした課題先進地域とも呼べる状況にあり，このような背景のもと，経済振興や交流人口の拡大，当該地域の認知度向上などを図る地域再生を目的として始まった事業が大地の芸術祭である．大地の芸術祭が開催されるきっかけは 1994 年に新潟県知事が提唱し，創設された「ニューにいがた里創プラン」である．これは新潟県内の広域市町村圏を対象とする事業プロジェクトであり，十日町市と津南町で構成される地域（当時は旧十日町市をはじめとする一市四町一村，十日町市，川西町，中里村，松代町，松之山町，津南町で構成される地域）が現代アートを中心とした取り組みで地域づくりを進展させようとする「越後妻有アートネックレス構想」を提起し，策定された．この構想の中の一つの事業が大地の芸術祭であり，アートディレクターである北川フラム氏を総合ディレクターとして迎えて，2000 年から大地の芸術祭が始まった．

芸術祭の実施に際しては，作品作製のために日本国内のみならず海外からもアーティストが数か月にわたって地域に入り，住民の生活圏で作業活動にあたることなどを含め，地域外からいわゆるよそ者が来ることに抵抗感を示す住民が少なくなかった．また，現代アートを中心テーマとするソフト面での事業という，これまでにない取り組みということもあり，地域活性化の効果が不透明であることを指摘されるなど，地元住民の反対の声が多かった．このような中で重要な役割を果たしたのが北川ディレクターとボランティア組織である「こへび隊」の存在である．北川ディレクターは地域住民を対象とした説明会を数多く実施して事業に対する理解を深め，こへび隊は地域住民とコミュニケーションを図りながら芸術祭と地元住民とをつなぐ役割を果たした．こへび隊は学生などから構成されるボランティアの支援組織であり，芸術祭の運営支援やアーティストの作品制作のサポート，展示作品のガイド役などの活動にあたっている．北川ディレクターを中心とする

運営組織とボランティア組織を構成するこへび隊の熱心でひたむきな取り組みによって芸術祭への理解と協力が広がり，地域住民を巻き込んだ活動につながっていった [4]．新潟県の「ニューにいがた里創プラン」に基づく財政支援が終了した後の 2008 年には，NPO 法人越後妻有里山協力機構が設立され，以後，当組織が大地の芸術祭の運営や拠点施設の管理，こへび隊の人員募集と活動の管理，アーティストの作品管理などの作業に携わっている．

これまでに開催された大地の芸術祭の概要を表－1 に示す．表に示したとおり，回を重ねるごとに作品数や来場者数は増加しており，規模を拡大していることが見て取れる．2018 年に開催された第 7 回の芸術祭は過去最大の来場者数 548,380 人を記録した．第 8 回は 2021 年に開催される予定であったが，新型コロナウイルスの影響により一年延期された．第 8 回の大地の芸術祭は，コロナ禍において密になるのを防ぎ，来場者を分散させるために，2022 年 4 月 29 日から 11 月 13 日までの 145 日間と会期を大幅に伸ばして開催された．

表-1　これまでに開催された大地の芸術祭の概要

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
会期	2000/7/20 ～9/10	2003/7/20 ～9/7	2006/7/23 ～9/10	2009/7/26 ～9/13	2012/7/29 ～9/17	2015/7/26 ～9/13	2018/7/29 ～9/17
作品数	153点	220点	334点	365点	367点	378点	379点
参加集落数	28集落	38集落	67集落	92集落	102集落	110集落	102集落
参加アーティスト	148組	157組	225組	353組	310組	363組	355組
来場者数	162,800人	205,100人	348,997人	375,311人	488,848人	510,690人	548,380人
こへび隊登録人数	約800人	711人	930人	350人	1,246人	2,270人	2,740人

２．２　テキストマイニングによる分析

これまでに開催された大地の芸術祭の終了後には，開催回ごとに総括報告書が作成されている．第 3 回目以降には，住民らを対象としたアンケート結果が掲載され，その中には，芸術作品が設置された集落・町内の代表者を対象とした自由回答のアンケートが，また第 4 回目以降には，地元商業者（十日町市・津南町の宿泊施設，飲食店，ガソリンスタンド，コンビニ経営者）を対象とした自由回答のアンケートが実施され，その回答が記載されている．本報では，これら第 3 回から第 7 回の総括報告書に記載されている自由記述回答結果を分析対象資料として用いた．総括報告書は，十日町市の「今までの大地の芸術祭の記録の紹介」ウエブサイトからダウンロードした．質問内容と各回における回答掲載件数は以下の通りである．

・芸術作品が設置された集落・町内の代表者を対象としたアンケート

「大地の芸術祭に関わった集落・町内として，大地の芸術祭の運営のあり方や今後の方向性などに対し，ご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください」

回答掲載数総計 160 件

（第 3 回：回答掲載数 22 件，第 4 回：回答掲載数 35 件，第 5 回：回答掲載数 41 件，第 6 回：回答掲載数 32 件，第 7 回：回答掲載数 30 件）

・地元商業者（十日町市・津南町の宿泊施設，飲食店，ガソリンスタンド，コンビニ経営者）を対象としたアンケート

「大地の芸術祭に対するご意見・ご感想がありましたら，下の欄にご記入ください」

回答掲載数総計 305 件

（第 4 回：回答掲載数 124 件，第 5 回：回答掲載数 79 件，第 6 回：回答掲載数 32 件，第 7 回：回答掲載数 70 件）

人々の発話や文章などのテキストデータの全体的な内容の傾向や主題を捉えるにあたっては，分析者の主観的で恣意的な価値判断に基づく意味解釈が入り込む可能性を排除するのが望ましい．今回，対象データの分析には，コンピュータの利用による計量的分析手法でデータを整理・分析する計量テキスト分析ソフトの KH Coder (ver.2.00f)を用いた [5]．KH Coder は対象の文章を形態素解析し，共起ネットワークによる分析や対応分析などの手法を用いた種々の検討が可能である．KH Coder による分析にあた

っては，語句の表記ゆれの統一，機械的・自動的に抽出されない語の登録といった前処理を行い，適切な分析が可能な状態に設定した後で分析処理を実施した．分析は，同じ文書中によく一緒に出現する語同士を線で結んだ共起ネットワークの図示，特徴語一覧の作成，さらにアンケート回答中の語だけではなくコンセプトに焦点をあてて分析するためのコーディング処理を実施し，それぞれのコードごとのアンケート傾向を調査するといった内容で実施した．

３．テキストマイニングによる分析結果

テキスト分析に先立ち，回答選択型アンケートから地元住民の大地の芸術祭への意識を見てみると，集落に作品が設置されることを 60～70%の割合で希望しているとともに，80%前後の高い割合で作品設置に協力する動きがあったことが報告されている．そして，大地の芸術祭の継続開催を希望するかという質問には，継続開催してほしいと回答した人の割合が，第 3 回が 49.0%，第 4 回が 70.0%，第 5 回が 89.8%，第 6 回が 92.3%，第 7 回が 87.8%と，開催を重ねるごとに高まる傾向を示した．第 5 回以降は 90%前後の割合で今後の継続開催を希望する結果が示されており，大地の芸術祭への地元住民の理解の広がりを表している．

続いて，自由記述回答のアンケート結果を対象としたテキスト分析の結果を示す．KH Coder の分析から抽出された語句同士の関連を示した共起ネットワークを**図－1** および 2 に示す．

共起ネットワークは，同じ段落中によく現れる（共起する）語同士を線で結んだネットワークで図示したもので，特定の語と関連が強い語との間のつながりを表したものである．ここでは出現回数の多い語ほど大きな円で描かれ，強い共起関係ほど太い線で結ばれている．**図－1** に示した作品設置集落・町内の代表者の場合には，「良い－人－見る－来る－大地の芸術祭」という芸術祭に訪れる来場者への好印象が語られている一方で，「負担－高齢－協力－大変－集落」や「今後－困る－管理－雪」，「問題－住民－駐車－整備」といった語同士の結びつきが強いことが認められた．これらの共起性からは，

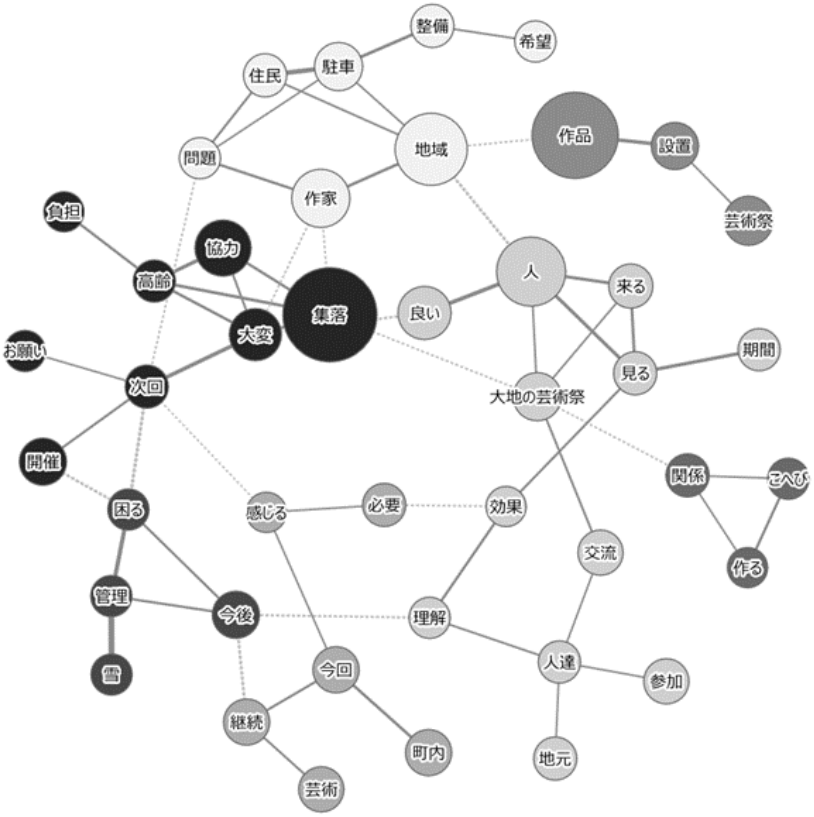

図-1　作品設置集落・町内の代表者の自由記述アンケート結果における共起ネットワーク

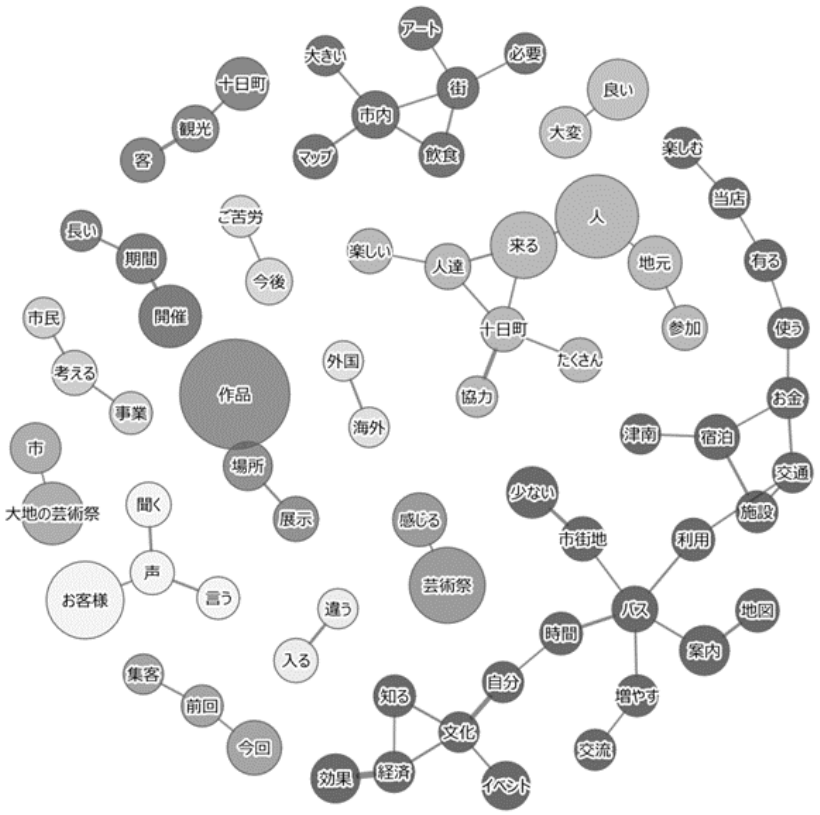

図-2　地元商業者の自由記述アンケート結果における共起ネットワーク

回答選択型アンケートからは見えてこない住民らの不安感や負担感，抱えている問題意識を読み取ることができた．**図－2** の地元商業者の共起ネットワークからは「経済－効果」，「十日町－観光－客」，「協力－十日町－たくさん－来る－人」といった語の共起性が見られ，事業開催に伴って多くの来場者が地元を訪れることによる経済波及効果を背景とした好意的な声が多く寄せられた．

次に，各開催回での特徴的な語を抽出した．その結果を**表－2** に示す．分析対象の資料データに比して特に高い確率で出現している語を，どの程度特徴的であるかを示す Jaccard 係数の値から高い順に 10 語ずつ，各開催回と調査対象を特徴づける語として抽出した．表中の項目の最初の数字は開催回を表す．例えば，「3-作品設置集落，町内」であれば，第 3 回の開催回における分析結果を意味している．

作品設置集落・町内の代表者を対象とした分析からは，第 3 回での「賑わい」や「継続」といった芸術祭開催に伴う活性化や事業継続の気持ちを表す言葉が抽出された一方で，「負担」（第 4 回）や「困る」（第 4 回および 6 回）といったマイナスの感情を示したものや，車で訪れる来場者の駐車問題を指摘する言葉（第 5 回），芸術祭の支援作業にあたる地域住民の高齢化の影響を挙げる言葉（第 6 回），初回開催から 20 年近くが経過したことから道路や関連施設の整備を求める言葉（第 7 回）が特徴語として挙げられており，芸術祭に対する住民らの複雑な感情が見て取れた．地元商業者における特徴語を見ると，第 4 回では芸術祭というイベント開催に伴う関心が特徴的に挙げられている．第 5 回以降を見ると，「お客様」という言葉が代表的に示すように，芸術祭への来場者が及ぼす経済的側面に比重が置かれているのが読み取れた．このように，調査対象である両者の挙げた言葉の位置づけが異なることがわかるとともに，各開催回において発せられる言葉の概念傾向が変化していることが見て取れる．これらの分析から抽出された調査対象である両者の各回における言葉の変異の傾向については，コーディング分析によりさらに検証したい．

これまでは自由記述アンケートの回答中の個々の言葉に着目して，資料中に多く出現した語や，それぞれの開催回ならびに調査対象別に特徴的な語の分析を行ってきた．続いては，個々の言葉というよりも，その言葉が意味する基本的な概念やテーマに着目し，その出現回数を計量することによって特定の

表-2　開催回および対象別の特徴語

3-作品設置集落、町内		4-作品設置集落、町内		5-作品設置集落、町内		6-作品設置集落、町内		7-作品設置集落、町内	
作家	.146	集落	.147	集落	.135	協力	.135	整備	.147
賑わい	.136	今後	.123	駐車	.128	集落	.119	集落	.141
費用	.125	作家	.091	地域	.118	参加	.109	要望	.091
理解	.111	地域	.089	こへび	.085	出る	.100	人	.084
町内	.100	負担	.079	大変	.082	高齢	.100	道路	.083
住民	.097	理解	.075	作家	.082	野菜	.094	施設	.075
継続	.093	困る	.070	住民	.082	スタッフ	.083	希望	.073
希望	.091	協力	.069	大地の芸術祭	.075	大変	.077	バス	.070
見える	.091	設置	.065	作品	.072	管理	.077	今回	.068
申し上げる	.091	事業	.065	部落	.071	困る	.075	必要	.067
		4-地元商業者		5-地元商業者		6-地元商業者		7-地元商業者	
		芸術祭	.104	お客様	.148	お客様	.132	芸術祭	.125
		大地の芸術祭	.090	人	.110	店	.109	作品	.113
		来る	.083	継続	.105	分かる	.098	今回	.108
		開催	.078	来る	.097	増える	.077	たくさん	.092
		芸術	.075	十日町	.084	マップ	.077	感じる	.090
		市	.073	お願い	.080	増やす	.075	集中	.081
		地元	.069	無い	.079	一部	.075	少ない	.081
		今回	.068	イベント	.076	声	.071	お客様	.075
		案内	.068	出来る	.073	良い	.069	良い	.075
		継続	.066	開催	.071	地元	.069	来る	.074

テーマに言及した回答の割合をもとに比較を試みるコーディング分析を実施した．コーディング分析にあたっては，「芸術・アート」，「商業・経済」，「事業」，「協力連携」，「活性化」，「負担・困惑」という 6 つのコードを設定した．コーディングルールとして，「芸術・アート」であれば，芸術，作品，作家，アートなど，「商業・経済」であれば，お客様，店，観光，宿泊など，各テーマを構成する言葉をコード付与の条件として設定し，これらの言葉を含む文が当該コードに言及していたものとして集計した．コーディング分析の結果を**図－3** および**図－4** に示す．

コーディング分析から，開催回ごとのコード傾向の変化を通して大地の芸術祭に対する意識変容の推

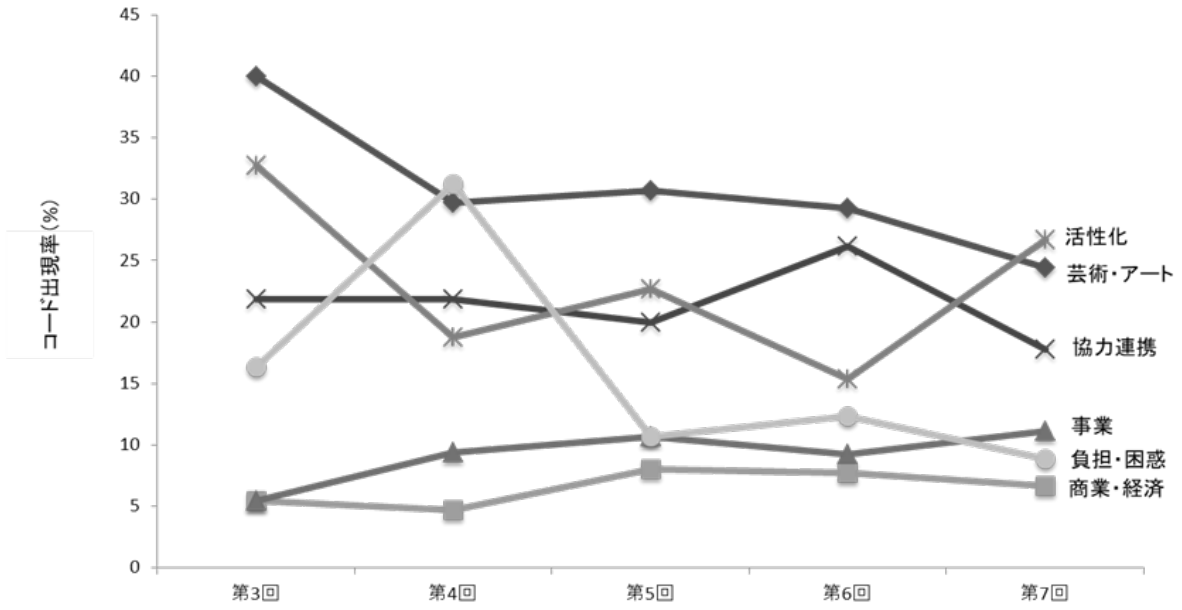

図-3　コーディング処理による分析（作品設置集落・町内の代表者）

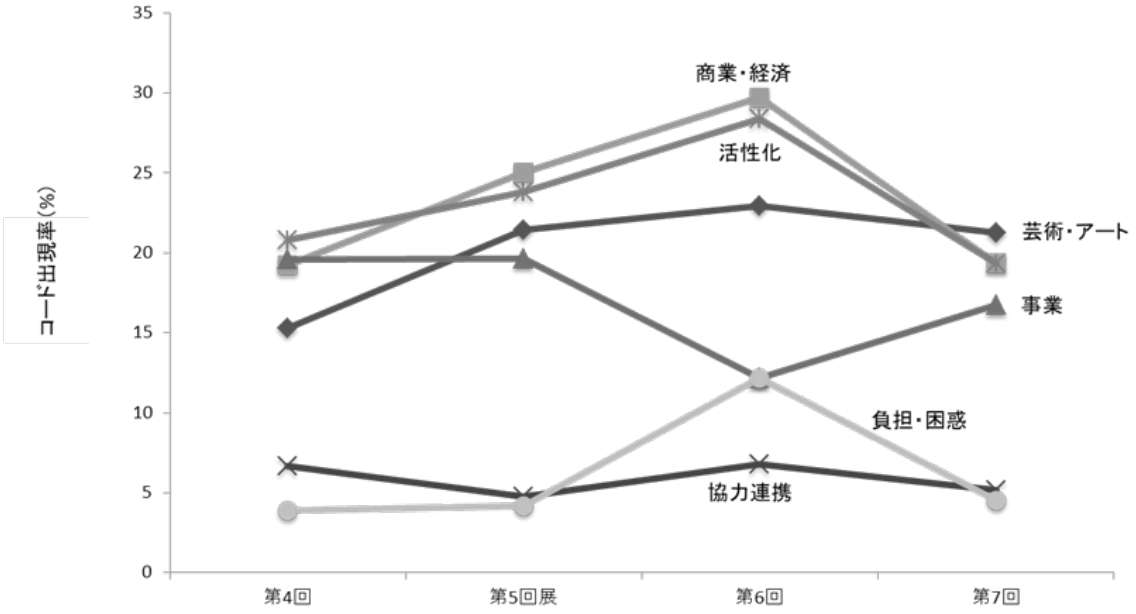

図-4　コーディング処理による分析（地元商業者）

移を読み取ることができた．**図－3** に示した作品設置集落・町内の代表者のアンケート回答に基づくコーディング分析の結果からは，第 4 回で大きく「負担・困惑」コードが増加しているのが見て取れる．これは，第 4 回が開催された前年の 2008 年に NPO 法人が設立されて芸術祭の運営や管理の在り方が大きく変更されたこと，県による財政支援補助の終了といった変化を受けて新しい事業の在り方を模索した時期にあたることから，芸術祭実施に関わる地元住民の負担感や困惑する意識が高まったものと考えられる．これら負担・困惑の感情について，個別にどのような文章中に負担・困惑概念を表すコードが付与されているのかを見てみると，「（各地域が支払う）整備費の負担が大変」，「自分の生活が多忙で地域おこしに関わる気力もない」，「反対派は冷ややかに見ている」，「高齢化が進み．．」という結果であった．そして直近の第 7 回の結果を見ると，負担・困惑の概念項目が低下し，活性化の概念を示す項目が高まっていることが読み取れた．これは長い期間において育まれてきたボランティアと住民らの交流といった地域における関係性やつながり構築が機能し，活気をもたらすことに寄与しているのではないかと推察される．図からは，負担・困惑と活性化の概念は，逆相関の傾向が見て取れるが，両者の間の因果関係は不明であり，地域住民の活性化の要因については更なる検証が必要であろう．

図－4 に示した地元商業者のコーディング分析における全体的な傾向を見ると，商業・経済と活性化に関わる項目に関心が高いことが認められる．第 7 回に着目すると，事業に関する事柄が増加している一方で他の項目のコード出現率は低下していた．これは，大地の芸術祭の観光事業としての特性が変化していることに起因していることが原因と考えられる．開催を重ねるたびに来場者が増してきた大地の芸術祭であるが，特に近年は海外からの来場者が増えている．**図－2** の共起ネットワークを見ると，中央部分には外国－海外という共起性が現れており，これらの言葉は主に第 7 回のアンケート回答の文章中に出現している．第 7 回において事業に関する概念が高まったのは，どのように多くの外国人観光客を迎え入れてアテンドするのか，事業の在り方について言及した結果であると思われる．

４．考察

大地の芸術祭は，新潟県が策定した「ニューにいがた里創プラン」の枠組みの中でスタートした地域活性化事業であり，現代アートと地方の活性化とを結びつけた先駆的な事例として意味づけられる．それゆえに当初は地域住民の理解を得ることが難しく，不安や戸惑いが多かった．新潟県と十日町市などとの自治体による広域事業である「里創プラン」は 10 年間の期限付きのプロジェクトであり，2006 年

に終了した．プロジェクトとして県からの財政支援が得られなくなり，今後の持続的開催に向けた事業運営はどのようにするのかなど，芸術祭に関わる十日町地域の自立性が問われる状況になった．今回，分析の対象とした第 3 回以降の時期はプロジェクトとしての実施期間終了と新しい運営の在り方を構築する期間にあたっており，特に集落・町内の代表者の意識に与える影響が大きく変化する要因になった．回答選択型アンケート結果からは，芸術祭の継続的な開催を希望する声が多数であり，好意的な意見が圧倒的な結果を示していたが，事業運営に関わる組織体制の転換などの点を背景として，テキスト分析の結果からは，地域住民には負担や困惑の気持ちが生じていたことが明らかになった．このように，回答選択型アンケートでは見えてこない潜在的な意見や課題，今まで気付かなかった言葉の関係性がテキスト分析により浮かび上がった．また，地元商業者らの意識を見ると，芸術祭に関わる負担や困惑の気持ちは低いレベルにあり，経済波及効果を好意的に感じている傾向が明らかになった．

大地の芸術祭の進展に伴って従来の組織構造や価値観の転換が図られ，新たな関係性や仕組みが創出されて，人々の意識の変容や事象への関わりが変化してきたことが指摘できる．意識の変化は人々の発話，テキストに影響を与えることから，大地の芸術祭が人々の意識や考え方にどのような影響を与え，変容を形成したのかという点について，人々が発する言葉に着目してテキストマイニングの手法を用いた分析を試みた．テキスト分析では，回答選択型アンケートでの好意的な意見と対比するかたちで住民らの不安感や困惑の気持ちに焦点を当てて議論を行ってきたが，住民らの間に大地の芸術祭の開催に伴う他者との協力関係や相互作用が生じてきたことも読み取れる．人々の交流といった視点に着目すると以下のような意見が挙げられており，地域住民の新たなつながりや関係性構築を志向する意識が生まれてきたことが認められた．

「外部との交流，人間関係が深まったこと，感謝申し上げます」（第 3 回）
「過疎と高齢化が進み淋しくなって来た集落で作品づくりをとおして作家との交流が生まれたり，若者との交流が出来て良かった」（第 5 回）
「地域との関係が深くなり，大地の芸術祭以外でも交流が期待できる」（第 5 回）
「日々の協働を通じて助け，助けられる関係性がうまれたら素晴らしいと思います」（第 6 回）
「芸術祭では地域の人が手伝ったり，おもてなしができる相互の関係を深めてもよいと思う」（第 6 回）

地方の活性化策の成功事例として注目され，瀬戸内国際芸術祭などの多くのフォロワーを生み出した大地の芸術祭は，当初の行政機関が主となって対応するかたちから，多様な価値観や考え方を持つ人々，グループが互いに影響し合いながら事業を進めていく形態へと転換していった．芸術祭の開始当初は，社会的課題の解決を志向し，行政主導の仕組みの中で中央集権的な固定的かつ垂直構造の組織体制のもとで事業運営がなされてきた．その後は，事業主体の変更を背景としながら，NPO 組織立ち上げなどに象徴される住民主体型の仕組みをもとにして，地域の新たな価値創造を志向し，多様性と柔軟性をもった水平連携型の運営の在り方に変わっていった．その過程においては，危機感を持ちながら地域資源の価値を上げるチャンスととらえ，多様性を持った人々や組織の連携を背景とした住民らによる新たな価値創造の取り組みが進められてきた経緯があるものと思われる．

大地の芸術祭の北川総合ディレクターは，この事業は芸術祭そのものが目的ではなく，住民参加のかたちでワークショップをやり，木道やコテージを作ったりするなど，長期間にわたる協働作業によって地域のデザインをやることが本当の目的であると語る．これは，行政が計画して予算をつけて業者が実施する従来型の公共事業からの切り替えを意味している．北川ディレクターは，アートを単なるオブジェや物ではなく一つの運動体として捉えており，人と人とを結びつけて組織化していく動的存在としてアートを位置づけ，人と人との関わりの過程において意識の変革を促すことがアートの役割であると論じている [6]．“行政機関から住民へ”という上下関係に基づき，上から降りてくる課題に受動的に対応するのではなく，地域住民自らが長期的なスパンで主体的に地域マネジメントに関わりを強めて他者との連携・協働関係を進め，社会制度や関係性の変化を伴いながら新たな価値創造の取り組みを志向する流れの中で，地元地域の将来を見据えた自律的な活動を継続的に回し続けるプロセスが重要となってくる．十日町市の市報における市長のインタビュー記事の中で，70 歳代の人たちが 30 年後の地元地域のことを語っていることが強く印象に残っていると記されている [7]．このような未来志向の意識のもとでの持続的な営みにつながる活動こそが重要であり，

地域に住んでいる人たちが当事者意識をもって長い時間軸のもとで地域課題に取り組む姿勢が肝要であろう．当初の計画段階を含めると 25 年余りの期間に渡って開催地域との関わりを持ってきた大地の芸術祭の存在が，このような意識醸成に寄与してきたことが類推される．

５．おわりに

本報では，現代アートを題材として用いた地域活性化の先駆的取り組みとして知られる大地の芸術祭を事例として取り上げ，地域の人々が発した言葉に着目し，テキストマイニングの手法を用いて人々の意識変容や当該事業への関わりについての分析を実施した．事業運営の経緯などをふまえつつ検証を試み，今まで表立って議論されていなかった地元住民の潜在意識や，活性化概念と負担・困惑概念との間の相関関係の可能性などについて分析的に明らかにすることができた．人々が発する言葉という非構造化データに着目し，その探求可能性を示した側面からも，本報の取り組み結果の有効性が示唆できる．

現代は，目の前に存在する課題を個別に解決すれば全体として好ましい結果が得られるという調和が失われている時代であり，良い変化に貢献するための行動を伴うイノベーションが求められている [8]．コロナ禍に代表される社会状況の変化をふまえて，今後の持続的な地域の在り方においては幅広い視点からの議論や検証が必要であると思われるが，現代の人々が持つ多様な考えや価値観を捉え，地域内外の人々を巻き込みながら，人々の相互関係性に基づく地域資源の構築や非物質的な価値創造につながる様々な取り組みの展開が求められるところである．

最後に，本報における限界点と課題を述べる．第一に，今回は地元住民らの声を対象とした分析を実施したが，芸術祭は，こへび隊をはじめとするボランティア関係者，運営組織に関わる人々，そして来訪者の方々も含めた多くの人々が関わり，ステークホルダー同士の相互作用を伴う価値共創的な創造行為が行われている．多様な側面を有する大地の芸術祭の特性を捉えるには，地元住民だけではなく，芸術祭を取り巻く様々な属性の人々を対象とした調査分析が必要であると思われ，この点については分析対象のサンプル属性の限界が指摘できる．第二に，対象事例の分析については計量テキスト分析の手法を用いたが，様々な立場の多様な価値判断を有する人々を分析対象とするにあたっては，複数の視座や手法を取り入れたトライアンギュレーショナルな分析アプローチの採用が望ましい [9),10)]．複雑な社会現象に関わるダイナミックな相互関係性を明らかにするに際しては，複眼的な視座で分析対象にアプローチをすることが有効であり，より精緻な議論検証が必要とされるところである．

参考文献

1) 星井進介：工業高専学生のマネジメント思考，長岡工業高等専門学校研究紀要，第 57 巻，pp.46-50，2021.
2) 日和恭世：ソーシャルワーク研究におけるテキストデータ分析に関する一考察，評論・社会科学，106 号，pp.141-155，2013.
3) 古田徹也：言葉の魂の哲学，講談社，pp.156-161，2018.
4) 大和総研：日本の各都道府県における地域の資金循環及び流出入についての調査研究報告書，平成 27 年 3 月内閣府委託事業，pp.46-63，2016.
5) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析，ナカニシヤ出版，2014.
6) 北川フラム：アートの地殻変動，美術出版社，pp.261-265，2013.
7) 市報とおかまち：市長対談第 7 弾，明治大学 教授 小田切好美×十日町市長 関口芳史，2016 年 1 月 10 日号.
8) 吉川弘之：イノベーションの行動理論，産総研 TODAY，2007 年 1 月号，pp.8-15，2007.
9) フリック, U：質的研究入門－＜人間の科学＞のための方法論，小田博志・山本則子・春日 常・宮地尚子訳，春秋社，p.327，2002.
10) 矢守克也：アクションリサーチ・イン・アクション，新曜社，pp.175-178，2018.

（2022. 9. 27 受付）